

トピックス
1. 安倍元首相の国葬
2. 南国土佐を後にして 高知編



福留経営労務管理事務所  
 姫路龍馬会  
 社会保険労務士・行政書士  
 福留 章

# 龍馬通信

No. 58  
 2022年10月号

## 寒露～霜降の候 「秋の夕暮れ」

秋分を過ぎると、1日2～3分ぐらいのペースで、日の出が遅くなり日の入りが早くなる。釣瓶落としの秋の夕暮れ。釣瓶（つるべ）とは、井戸の水をくみ上げるときに使う桶のこと。井戸の上の部分に滑車をつけて縄を結んで使っていた。今では時代劇のおかみさんたちの井戸端会議のシーンで見るとストーンと底まで落ちていく。その早さを、秋の夕暮れの早さになぞらえるようになりました。子供のころ古井戸に石を放り込んでポチャンという音がするまでの空白の時間を楽しんでいた。何が楽しいのかよくわからないが、なんとなく物悲しく寂しい音がした。十数メートルをストーンと落ちていく釣瓶。そのようにまだ明るいと思っていたら、もう真っ暗。人の顔も見えない。時間に追い越されたような慌ただしさを感じるとき。せめて次第に長くなっていく秋の夜長を楽しみたいものです。

9月28日現在、木星が月の近くでひととき明るく輝いている。天体を仰いで星座を追ったのは遠い昔。もうそんな夢追い人を気取る気持ちもない。ただお月さまのきれいな季節ではある。日本も10年後ぐらいに月面着陸を計画しているそうだが、まあ随分無粋な話だ。アメリカも中国も月面着陸・探査の計画をしている、お月さまは眺めるものだと私は思っている。生臭い資源の争奪戦など夢のかけらもない話。思い出すのは土佐の高知の桂浜。お月見の名所。親に連れられ家族で輪になって月見の宴をしたのが忘れられない。月を愛でながら、ぬる燗のお酒を静かに飲む。結局そこにオチがつく。皆様も秋の夜長を楽しんで、季節を感じてください。



寒露 10月8日頃  
 霜降 10月23日頃

## 随筆 『龍馬と私』 ～龍馬に学ぶ 抜群の行動力～

幕末において龍馬が活躍したのはわずか5年ほどのことである。文久2年（1862年）28歳から慶応3年（1863年）33歳。脱藩から凶刃に倒れるまでの5年と数か月ということになる。勝海舟と運命的な出会いをし、その開明的な世界観に触発されてからの龍馬は、火が付いたように勝の使いとして幕府上層部に知己を得、開明派の薩摩・長州の西郷や大久保、桂など当時藩論をまとめ実践していく実力者たちや天下の学者たちを訪ねて回り、情報知識を体にしみこませていく。江戸に下り京に上り、越前、長州、九州巡回を繰り返す、東奔西走まさに鬼神のごとく飛び回っている。当時土佐の人は「まいくり龍馬」と渾名で呼んだ。まいくりとは、土佐の方言で、歩き回ることを。慶応2年（1866年）池田屋事件の後は傷の療養

もかねて薩摩の霧島へお龍を伴って新婚旅行を取行している。その行動の多様さは資料を読んでも目がまわるぐらいだ。行く先々で変わった奴、面白い奴と可愛がられる。一つ尋ねては二つ教わり、三つ尋ねては五つ教わり。

龍馬はもともと無学の人。耳学問がすべて。話を聞いて核心をつかむことが得意であった。土佐の厳しい身分制度の中で培われた差別に対する怒りと正義感。弱い者の味方となり助けようとする義侠心。厳しい環境の中で生計を立て、子を育て、妻を養う、そんな者こそ生かされねばならないという使命感。彼の体内にはそれらのものが混然一体となって存在し、その燃えたぎる情熱が彼の行動力を支えた。龍馬は権力をかさに着て、何かをするタイプではない。思い立てば自分で何事もしなければならぬタイプだ。「律儀」は彼の持つ美学の一つだ。薩長同盟に最後のオチを付けたのは龍馬である。その律義さゆえに彼は人から信用され、女にもてた。それを意識せずに自然体でこなすところも龍馬の魅力である。



## 播州日誌



### 安倍元首相の国葬

国論を二分したまま、9月27日故安倍晋三元首相の国葬が行われた。選挙戦中に銃撃により67歳の波乱に満ちた人生の幕を下ろした。そのわずか7日後に「国葬」を決定。結果自らの政権の首を絞めることになった。法的根拠のあいまいさ、国会軽視、旧統一教会との癒着の実態。国葬賛成の声もあつという間に反転し反対の声は60%強に達した。岸田政権の未熟さからくる不手際が目立つ。事件直後、現場等での死を悼む献花の人の列は数日絶えることがなかった。国葬当日の献花の人の列は、2万3千人以上に達したという。吉田茂元首相以来5年ぶり戦後2例目の国葬。近時は自民党・内閣葬が定着していた。吉田茂元首相の場合は死後10経過後の国葬であり政治的評価は、歴史的に確定していた。安倍元首相の政治的評価はまだ固まったものでなく歴史的経過を待たねばならない。功績も疑惑も同じくらい併存する。国民に弔意を強制しない国葬を国葬といえるだろうか。国全体として弔意を示すというのが国葬だと思う。私個人の意見を言うならば国葬決定のプロセスや、軟弱な政権を浮揚させる政治目的に嫌悪を感じながら、不運にも凶弾に倒れた元首相の功績の部分は評価すべきだと思う。8年8か月という憲政史上最長の在年期間を思うとそれだけで胸が熱くなる。首相の1日は分刻みである。激務と言って間違いない。功罪半ばとしても、その緊張感の連続を思うと、心から「お疲れさま」といいたくなる。政治家に限らずこの世の中に真っ白な人などいない。欲望とそれに打ち勝とうとする良心の呵責にさいなまれながら生きているのだ。首相ともなれば利権を求める有象無象の人が押し寄せる。それを掻き分け掻き分け政治を進めなければならないのだ。

ともあれ厳戒態勢の中、厳粛な葬儀が執り行われ無事になしとげたことは国の体面も保たれよかったと思う。国葬の検証も必要だと思う。賛成・反対の声だけではなく、真ん中の声にも耳を傾けるべきだ。国に功績のあった人に対する国民全体の弔意を表す新しい方法をさぐるべきだ。と言いながら今後安倍元首相ほどの首相が政界に現れるだろうか。まあほとんど可能性がないように思う。

最後に、献花の人の列に向かって国葬反対のシュプレヒコールはどうか。賛成の人も反対の人も、たがいにその意思は尊重されなければならない。それが民主主義の基本ではないだろうか。

安倍元首相お疲れさまでした。心からご冥福を祈ります。

## ～南国土佐を後にして～

### 第3回 「高知編」 姉の進学問題

ポケットモンキーの人気は絶大で、毎日のように客が押し寄せた。特に夕方の退勤時には電車が停まる度に楠の下が賑わった。3か月ほどたって、楠に異変が現れた。どうやら猿が木の皮を食べて、それが原因で木が枯れ始めた。市役所の担当が来て、親父と大論争をはじめた。「俺は戦争に駆り出され、中支、フィリピンと転戦し、ミンダナオ島では、オーストラリア兵に撃たれ左肩貫通銃創という名誉の負傷・・・」とかなんとか言って、何とか問題のすり替えをはかったが、担当は頑として聞き入れず、結局それ相当の損害賠償をして落着いた。その後猿が病死してこの騒ぎの幕は閉じた。土佐では闘鶏が盛んで、土日になるとあちこちで開催された。脚に小さな刃を括り付けて闘わすのであるから、迫力は十分。場合によっては出血死することもある。店先では刃はつけなかったしもちろん賭けはしない。歩道にチョークで大きな円を描き、客がまわりに密集して見物する。2羽のシャモを闘わせる。例によって客寄せである。よくもまあ次々と考えるものだと感心する。果たしてどれだけの売り上げ向上に繋がったかは不明だ。少し年月を経たが、国の施策で零細企業の大規模化の推進が図られ多くの協同組合が生まれ、多くは「〇〇センター」と呼ばれた。高知の数社のクリーニング店が集まって、白もの（Yシャツなど）を共同で洗濯したり、洗濯資材の共同購買事業などの事業をする組合を作った。緩やかな連合のようなもので親父がセンターの初代理事長になった。無学な人であったが、世渡り上手なところがあった。数年後に意見の相違から、理事長の職を追われるのだが、小学校後半の3年余はなんとなく平穩に過ぎた。親父の商売もまあまあだった。6人の子たくさんだから、普通に貧しさを感じることもあった。月の大半は麦飯で、母は「体にいいから」と強がりを書いていたが、パサパサとした食感はあまりいい印象ではなかった。まあ隣近所同じようなものだった。8人家族そんなに大きな家ではなかった。父母が寝ているすぐ隣、ふすま一枚隔てた部屋で弟と寝ていた。季節は冬だった。七歳上の次姉に進学問題が持ち上がり、毎日のように父母が激しく言い合っていた。「高校ぐらいは…」という母と、女に学問はいらんという父。今思えば初めから勝負ありだが、当時は中卒で働く人が多かったので、親父の言っていることが無茶苦茶であったというわけではない。進学の季節が近づくとつれ激しさが増して父がついに母に手をかけた。私は両手で耳をふさいで論争に耐えていた。母が家を出ると言っ部屋を飛び出そうとする。父が引き留める。寝巻の袖が破れて、半狂乱の母が走り出そうとする。「お母ちゃん出ていったらあかん」「あかん・・・」ついに我慢ができなくなって泣きながら飛びついた私を母はしっかりと抱いて「あきら・・・泣かんでもええ、お母ちゃん出ていかんき」「雅子はお母ちゃんが学校へ行かすき・・・みちよってよ」きつくきつく抱かれながら、よくわからないまま、ひとまず安心した。

姉は定時制（夜間）高校に進学した。バトミントン部に入って部活を楽しみ、意義ある高校生活を送った。

小学6年生となり、周りは進学準備に入り受験勉強に余念がない。とはいっても私立を目指すのはごく一部であった。当時校区内には中高一貫教育の土佐中学校があり、公立としては潮江中学校があった。大体成績優秀者が受験するのだがクラスで5～6人というところ。総じて教育熱心な親の子が受験するのだ。先生からは受けてみたらといわれて受験はしたものの、家庭環境から見ても残念ながら、そういう体制になっていない。独立した部屋があるわけでもなく、親も別に金のかかる私立に入ることを望んでいるわけでもなかった。結局受験に失敗。自動的に公立行きとなった。



## アニメ映画 「すずめの戸締り」

鈴芽（すずめ）は、どこにでもいるような高校2年生。4歳の時、東日本大震災で母を亡くし、叔母である環（たまき）さんに育てられている。実家である福島を離れ九州の宮崎に住んでいる。辛い過去を持つ鈴芽ではあったが、友達にも恵まれ、平凡だけれど普通に平和な日々を送っている。母親代わりの環さんとも、つかず離れずの関係にあるが、心の奥底で、感謝と同量の違和感がある。



清楚なセーラー服にポニーテールがよく似合う少女鈴芽。岩戸鈴芽。海沿いの坂道を走るピンクの自転車。その通学路

で偶然出会ったイケメンというよりは「美しい景色のような顔をした」草太。その遭遇がとんでもない大冒険の始まりとなる。出会いは何の前触れもなくやって来た。誰かが歩いて坂道を登ってくる。町はずれのこの辺りでは珍しいこと。すれ違いざま、鈴芽は思わず「きれい・・・」とつぶやく。「ねえ、君」「この辺りに廃墟はない」「扉を探しているんだ」意味不明の言葉だけれど低い澄んだ声が、鈴芽の心にしみる。「人の住まなくなった集落だったら、あっちの山にありますけど・・・」青年はきれいな微笑を返し「ありがとう」。背を向ける青年に「はあ・・・」とため息をついて間の抜けた顔の鈴芽。

通学路の踏切で友達から「なんで赤い顔をしているの」と冷やかされる。胸騒ぎ、心臓の高鳴り、ドッキンドッキン。何だろうこれは。「遅刻するよ」友達の声をさえぎって、鈴芽は踵を返し、青年の後を追う。なぜ、なぜ私は彼を追っているの。頭の中で繰り返し反芻するが、確かなことはわからない。

青年の名前は草太。宗像草太。大学生であり、家に代々伝わる「閉じ師」でもある。使命感だけに支えられて「終わり戸」を閉じて廻っている。それは後でわかったこと。

青年を追って山に入り、廃墟に入り、ひときわ大きなホテルの中庭に至る。バブルの時代のリゾート地の成れの果て。円形の空間があり、地面には透明な水が溜まっている。その水溜まりの中央に白いドアがぼつんと立っている。恐る恐る近づくと、どこかで見たことがあるような。そう、いつも見る夢の中に出てくる扉。鈴芽は近くにあった石像を抜いてしまう。それは要石（かなめいし）であり抜いたとたんに化身して白い猫となった。同時のその猫のために草太は人間の姿から、鈴芽の母が手づくりした子供用の椅子に変身させられる。

草太は鈴芽に語り掛ける。愚かな人間の、自然（環境）破壊が続く中、各地のリゾート地などが廃墟になっている。人を脅かす災害や疫病は、後ろ戸の扉を通して、常世（あの世）から現世（この世）にもたらされる。「閉じ師」は災いが出てこないように、開いてしまった扉に鍵をかける。その土地を本来の持ち主である「産土（うぶすな）」に返すんだ。そのために日本中を旅している。

鈴芽は世の中で、誰も知らない所で、みんなのために大事なことをしている人の存在を知る。「大事な仕事は人から見えないほうが良い」とも草太は言った。草太に恋した鈴芽は閉じ師の仕事を手伝う。やがて「戦友」となる。白い猫を追って、廃墟から廃墟へ。宮崎から松山、淡路、そして神戸、東京。最後に福島。

襲い掛かる災害という名の妖怪。血と汗と泥にまみれながら闘い続ける草太（イス）と鈴芽。様々な苦難に立ち向かい扉を閉め続ける。私にもできる。私たちはできる。鈴芽はやがて深く、広く、熱く、強い心を持つ人になっていく。自分が死んでも必ず草太さんを助ける。草太さんをもとの姿に戻す。鈴芽は光の中で大人になっていく。

鈴芽の夢と希望に満ちた大冒険の旅は続く。神と人間の融合体のイメージ。繰り広げられるファンタジーとユーモア、アニメならではのスペクタクル。

さあ今度はあなたが旅立つとき、草太（子供用イス）と一緒に大冒険の旅に。